

第3章 京都大学本部構内 AU28 区の発掘調査

伊藤淳史 富井 眞

1 調査の概要

今回の調査地点は京都大学本部構内の東南隅に位置する(図版1-262, 図12)。ここに工学部物理系校舎(第VI期)の新館が計画されたため、1999年1月25日～3月2日にかけて予定地543㎡の発掘調査を実施した。一帯の既往の調査成果として、奈良時代の竪穴住居(75地点)、中世の掘立柱建物跡(124地点)、弥生時代前期の流路(219地点)などがあり、今回もこうした時代の遺跡存在が予想された。調査の結果、調査区の狭小さと攪乱部分の多さも影響して、重要な遺構は発見されなかったけれども、中・近世の包含層から整理箱5箱分の遺物出土をみたほか、第5層の黄白色砂質土上面で、植物根茎痕かとも考えられる無数の小孔を検出した。一帯の土地利用状況を復元するうえでは参考となろう。なお、現地調査と遺物整理は伊藤淳史と富井眞が担当し、長尾玲・菅野類・川本紀子・下坂澄子が補佐した。本章は第1・2節を伊藤、それ以外を富井が執筆した。

2 層 位

基本的な堆積状況を調査区西壁の層位で代表させて示す(図12)。第1層の表土は、近代の大学設置以降の堆積。第2層の灰褐色土は江戸時代の遺物包含層。畑の耕土層であったとみられる。第3層の茶褐色土は中世の遺物包含層。土師器の細片を含む。第4層の黒褐色土は、部分的にしか存在しない。遺物をほとんど含まないので細かな時期は決めがたいけれども、古代にさかのぼる可能性がある。第5層は、黄褐色土と黄白色砂質土が混じり合いながら存在し、無遺物である。そのさらに下層には白色砂の堆積を確認している。

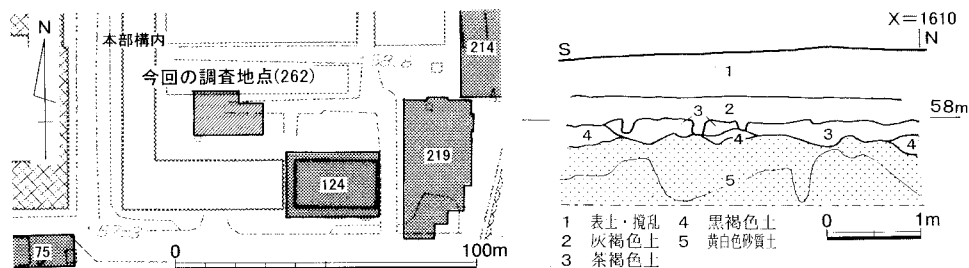


図12 調査区の位置(縮尺1/2500)と西壁の層位(縮尺1/80)

3 遺構と遺物

(1) 遺 構 (図版 7, 図13)

検出された遺構は、近世では耕作関連と思われる溝と杭列があり、中世では土坑を確認している。近世・中世ともに遺構にともなう遺物は出土量に乏しく、遺構の細かな帰属時期を特定することは困難である。

第4層の除去後、調査区のほぼ全域に広がる、直径5cm前後の斑点状のシミを確認した(図版6-2)。埋土が茶褐色土ないし黒褐色土のものは確認面からの深さがまちまちであり、方向も規則性はない。また、埋土が黄白色砂質土のものは、方向を変えながらそのまま第5層の下半にいたる、すなわち第5層下半の黄白色砂質土が第3層下面の高さまでもたらされている。前者は植物の根に起源すると想定しているが、後者については不明である。いずれのものも人工的に掘削されたとは考えがたい。また自然現象とも捉えがたい。両者とも平面分布にも規則性はなく混在するので、中世の農作物によるとも思われない。

(2) 遺 物 (図版 7, 図14)

出土遺物は少なく、整理箱にして5箱を数えるにとどまった。遺物の時期は縄文時代から近世にわたるけれども、その多くは近世の陶磁器、土器、泥面子であった。前述のようにまとまりをもって遺構にともなうという状況ではないため、以下、特徴的な遺物を種類ごとに記載していく。

Ⅱ1は黒褐色土から出土した橙褐色の土師器皿。「て」字状口縁手法B₂類に相当し、口

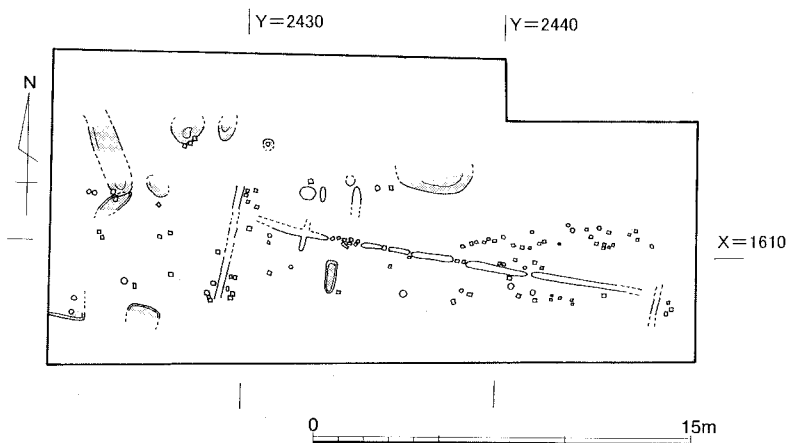


図13 検出遺構(梨地が中世の遺構) 縮尺1/300

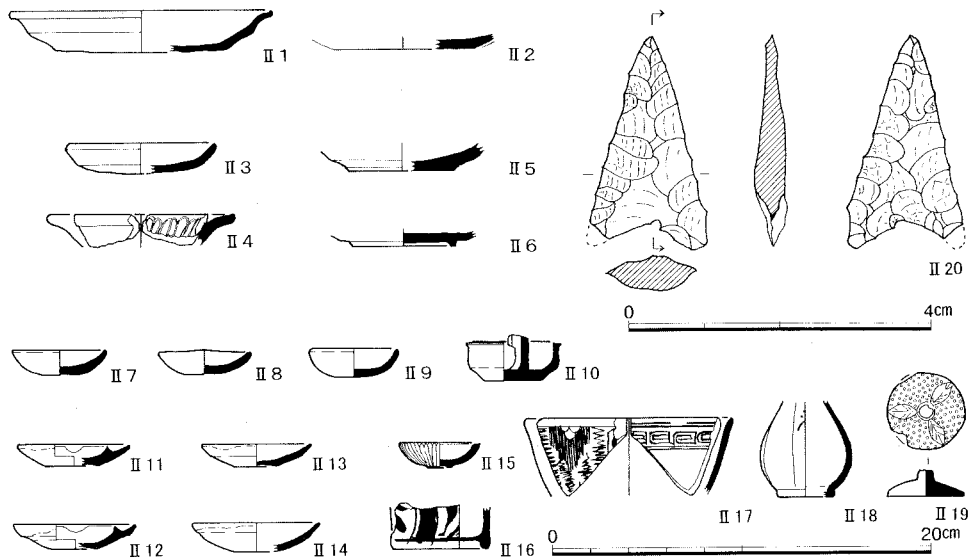


図14 出土遺物（Ⅱ 1土師器、Ⅱ 2緑釉陶器、Ⅱ 3土師器、Ⅱ 4古瀬戸、Ⅱ 5・Ⅱ 6灰釉系陶器、Ⅱ 7～Ⅱ 9土師器、Ⅱ 10～Ⅱ 14陶器、Ⅱ 15白磁、Ⅱ 16～Ⅱ 18染付、Ⅱ 19土師器、Ⅱ 20石鏃）Ⅱ 1～Ⅱ 19縮尺1/4、Ⅱ 20縮尺1/1

縁部が外反する。Ⅱ 2は緑釉陶器の底部。内外面とも釉がかかる。これらは数少ない平安時代の資料である。Ⅱ 3は淡橙色を呈する土師器皿で、1段撫で面取り手法D₂類。Ⅱ 4は古瀬戸の洗。内面に菊花状の文様をもち、黄緑色の釉がかかる。Ⅱ 5・Ⅱ 6は灰釉系陶器の底部。前者は円盤状高台で後者は貼付高台。これらはいずれも、第2層から出土している鎌倉時代のものである。Ⅱ 7～Ⅱ 19は近世の土師器と陶磁器。Ⅱ 7～Ⅱ 9は手捏ねの土師器小皿。Ⅱ 7は暗橙色を呈し、内外ともきれいに撫でている。Ⅱ 8・Ⅱ 9はともに淡橙色を呈し、胎土中に離型材の雲母を多く含む。前者の口縁端部には対向する2ヶ所に煤が付着する。Ⅱ 10は陶器の小型秉燭。Ⅱ 11・Ⅱ 12は、外面露胎で内面施釉の陶器灯明受皿。Ⅱ 13・Ⅱ 14も、外面露胎で内面施釉の陶器灯明皿。口縁端部に煤が付着する。Ⅱ 15は白磁紅猪口。Ⅱ 16は染付の蕎麦猪口。Ⅱ 17は染付椀。Ⅱ 18は染付の仏花瓶か。Ⅱ 19は土師器の釉デンプ蓋。これらの遺物はいずれも近世後半に位置づけられよう。

Ⅱ 20は青白色を呈するチャート製の凹基石鏃。一方のかえりの端部をわずかに欠くが、ほぼ完形。1.4gを測る。第2層より出土しているけれども、あまり摩滅していない。縄文時代に帰属すると思われる。

4 小 結

本調査区からは、縄文土器片 4 点と縄文に帰属すると思われる石鏃 1 点以外には先史時代の遺物の出土はなく、また、京都大学構内で鍵層となる弥生前期末の土石流に由来する黄色砂層も、確認されなかった。古代以降の削平によって黄色砂が失われたとすると、その時代の遺物量の少なさから量れば、耕作地獲得のための造成ということになるが、古代にさかのぼる可能性のある第 4 層も中世の第 3 層もどちらも黄色砂が混ざったような堆積ではないことと、白色砂の上に堆積している第 5 層は下部が黄白色砂質土であり上部がやや粘性の強い黄褐色土であることを考えると、黄色砂は削平されたのではなくもともと分布しなかった〔清水1991〕、すなわち弥生前期の土石流に見舞われる直前にはここは相対的に高地だった可能性がある。そして、そのまま南南西へのびて総合人間学部構内の微高地へと南北に細長く連なるのだろう。本調査区ならびに南東に隣接する AT29 区（124 地点）からは弥生前期の遺物が出土していない点および、東南東 80m 程に位置する AU30 区（214 地点）の黄色砂に覆われた弥生前期の窪地の遺物の垂直分布状況がその東側からの廃棄を示唆する点から、微高地上でもこの辺りは人々の活動があまり活発ではなかったと考えられる。

東の AV30 区（219 地点）には中世に北の砂採取地帯と南の生活領域との境界を示す東西溝が設けられ、南東の AT29 区には 12 世紀の土坑墓と思われる方形土坑と 13 世紀中ごろの堀立柱建物が存在し、南西 70m 程の AT27 区（75 地点）では奈良時代の竪穴住居や 12～13 世紀の土坑墓群が検出されているが、本調査区からは古代・中世ともそれらに関連するような遺構・遺物は確認されなかった。従って、奈良時代に南西で営まれていた居住活動は、ここまでは展開していなかったことが示された。中世においても、上記の活動とは切り離されたあまり人の手が頻繁には及ばない空間だったようである。

かつて想定されていた、近世の吉田社の東照宮にとりつく道〔浜崎1983〕は検出されなかった。近世には、耕作関連と思われる杭列および溝跡のみしか存在しないという状況証拠からみて、ここに恒常的な道があったとは考えがたい。AV30 区北半にその存在が可能性として残るものの AT29 区・AU30 区では確認されていないことから、本調査区よりも北側に位置していたと考えたい。